

相馬永胤日記が伝える建国100年のアメリカ

—相馬はどのようなアメリカそしてニューヨークを体験したのか—

黒沢 眞里子*

はじめに

本学創設者の一人相馬永胤は、明治8年から2年間ニューヨーク市のマンハッタンに滞在した。コロンビア法律学校¹で学ぶ為である。そのときの体験を書きとめたポケット版英文日記が残されている。日記には明治9年（1876年）1月1日から明治10年（1877年）12月31日までの日々の記録が英文で几帳面に綴られている。帰国後も相馬は生涯に渡って日記を書き続けるが、そのスタートとなった日記である。

この度平成25年度に採択された科学研究費助成事業「相馬永胤家文書の基礎的研究—私立学校創立者の多面的分析のためのアプローチ—」の一環として、英文日記の翻刻を行った。日記のタイプ入力によって電子化されたことにより、日記で使われた語・語句の出現頻度の検索や、特定の言葉に添えられた形容詞の検討などが可能となり、様々な角度から相馬の体験を検証することができるようになった。興味深い結果を得てそれを拙稿「《史料紹介》相馬永胤日記—1876年（明治9）1月1日から1877年（明治10）12月31日—」において報告した²。その内容は、（1）使用された日記について、（2）気候と気温について、（3）一日の行動、（4）手紙のやりとり、（5）歩くこと、（6）食事、（7）その他の日常生活、（8）余

*専修大学文学部教授

暇活動、(9) 観光、(10) まとめと今後の課題、である。この解説の結論として、相馬が本来の目的である法律の勉強以外に様々な体験をして驚く程豊かな世界を広げていたこと、相馬の英文日記の中に崇高な意志と共に記録されている様々なモノや日用品に出会う面白さを体験できることなどを示した。

日記は備忘録的な簡潔な文章で、意見などほとんど書かれていないが、1年分を読み終わる頃には、素っ気ない文章の積み重ねから、相馬が日々体験したニューヨークがあぶり出しのように浮かび上がってきた。それは、ありのままの日常と日用品に出会う面白さといってもよい。感情が削ぎ落とされた文章だからこそ、読み手の感じるままに自由にその世界を歩き回れることができるのだろう。相馬の几帳面な英文日記は、明治初期の日本人留学生の生活を知る上で貴重な記録である。また、専修大学設立に関わる相馬も含めた4人の日本人留学生が出会ったニューヨーク滞在の記録であり、個人史、大学史において貴重な史料である。しかしそればかりでなく、当時のアメリカ、ニューヨークを知るうえでも興味深い糸口を与えてくれる。本稿では、《史料紹介》からさらに進んで、相馬が体験したアメリカ、ニューヨークに焦点を当て、相馬日記を覗き「窓」として、そこから見える建国百年を迎えたアメリカ、そして当時のニューヨークについて考えてみたい。

建国100周年のアメリカ

相馬が滞在した1876年は奇しくもアメリカ合衆国独立100周年という特別な年であった。科研報告書の日記の《史料紹介》でも述べたように、中表紙に「100周年日記」と印刷された特別な日記帳である。この記念すべき年にアメリカに居合わせた相馬は、どのような思いをもって新年を迎えたのか。期待して元旦の記述に目を落とすが、それらしきことは何も書か

れていない。冒頭、「新しい年の始まり、一年の計は元旦にあり。われわれの生活の楽しみと利益は時間の節約次第であるので、過去について無駄な後悔や反省あるいは将来に対する無益な憂いによって時間を浪費してはならない」（筆者翻訳）と年初の抱負で始まっている。「時は金なり」の思想を広めた建国の父の一人、ベンジャミン・フランクリンの処世訓のような調子である。その意味では、アメリカの建国100周年に相応しい言葉ともとれよう。続いて「私はニューヨーク市22番通りウエスト62番地のジャクソン夫人方に寄宿している」と場所を述べ、自分が今どこにいるのか、まずは時間と空間の座標軸を確認して新年をスタートさせている。

建国100周年記念フィラデルフィア万国博覧会

相馬は建国100年を迎えたアメリカについて、日記では何も述べていないが、建国100年記念としてフィラデルフィアで開催された万国博覧会には行っている。これは、1876年5月10日から11月10日までの6ヶ月間フィラデルフィアのフェアモント・パークで開催された万国博覧会である。アメリカ誕生から100年間でアメリカが成し遂げた成果を諸外国から見に来て欲しい、諸外国も最良のものを持ち寄り、友好的な方法で成果を競いあいたい、それがさらなる文明の進歩の刺激となるだろうと、その目的が報じられている³。独立宣言が採択された国家誕生の地、フィラデルフィアが開催地となり、スクルキル川の西、風光明媚なフェアモント・パーク内に会場が設置された（図版1）。

相馬は留学費用を工面してくれた旧彦根藩から教育指導の任を与えられて留学に同伴した井伊直達と石黒太郎の二人の少年たちを伴い、夏休みの6月30日（金）から7月7日（金）まで1週間万博見物に出かけている。相馬たちはピークスキル（マンハッタンから北に約70kmハドソン川沿いの町、2少年はここで学んでいた）を30日6時半に出発してニューヨーク



図版1 万博会場の鳥瞰図。

(*Magee's Illustrated Guide of Philadelphia and the Centennial Exhibition* より)

に向かい、そこから12時半の汽車で3時間半かけてフィラデルフィアまでやってきた。5ドルの往復切符 (excursion ticket) を買ったとある。フィラデルフィアではボーディング・ハウスという部屋を間借りする形の宿舎に宿泊している。

1 週間の行動

翌1日(土)は6時半起床、8時までに朝食を終えフェアモント・パーク内の万博会場に直行した。午前中は本館、美術館を見学し、昼食を食べるために日本館を訪れそこで3時間過ごした。その後、機械館、農業館、園芸館を見て、5時半に帰宿したとある。行き、帰りともに汽車 (steam car) を利用した。

2日は日曜日で万博会場は休館だった。当時の記事を読むと、安息日の日曜日も開館するか否かで激しい議論があったことが分かる。閉館反対派は、労働者が昼間来られる日が唯一日曜であることや、安息日とは関係な

い多くの市民、外国人来場者がいることなどを反対の理由とした。結局、多数派の意見が入れられ安息日閉館が決定されている⁴。

3日（月）は7時起床で、朝食を終えるや万博会場に向かった。農業、園芸館以外ほとんどの建物を見て回った。昼食はまた日本館でとった。日本人数名に会う。6時に帰宿。非常に疲れたと書いているが、夜にブロード・ストリートまでパレードを見に行っている。

7月4日（火）の独立記念日は、市内のチェスナット通りにパレードを見に行き、その足で、ステート・ハウスで開かれた式典を見学に行っている。大勢の人で混み合ってよく見えないので、11時半には宿に帰ったとある。夕方は、イースト・フェアモントパークで行われた独立記念日の花火を見に出かけた。見事な花火であったが、にわか雨に合い一目散に駆け戻ったと書かれている。

5日（水）は再び万博会場に行き、写真館、美術館、農業館、園芸館その他の建物を見学した。5時に帰宿。

独立記念日を挟んで、万博見学は3日で終了し、最終日はフィラデルフィア観光に費やし、インデペンデンス・ホールやカーペンターズ・ホールなどを訪れている。最終日7日の11時の汽車でニューヨークに戻り、相馬たちはそこから船でピークスキルに向かい夜の7時半に帰宅した。

相馬は万博見学3日間の間に、ほとんどの建物を見てまわったと日記には記されており、本館、美術館、日本館、機械館、農業館、園芸館、写真館の名前が具体的に記されている。とくに、日本館以外では、農業館、園芸館、美術館は初日と最終日と2回見ており、強い関心をもっていたことが知れる。そこで、とくにこの3つの建物についてそれぞれみていきたい。

農業館

農業館は、会場の北、本館からもっとも離れた場所に位置する壮大な建



写真1 農業館の外観。

ゴシック様式の巨大な建物。(Old Philadelphia in Early Photographs 1839-1914より)



写真2 農業館の内部。

(同書より)

物である。万博会場全体の鳥瞰図や案内図を見ると、平坦な場所を移動するように見えるが、実際は、敷地がいくつかの谷で分断されていた。そこで、交通の便のために、馬車や歩行者用の橋や鉄道が設けられ各会場を結んでいた。農業館も、そのような「ロマンチックな谷」で隔てられており、スクルキル川とフィラデルフィアを臨む見晴らしのよい場所に位置していた⁵。建物は南北約249メートル、幅38メートル、高さ22メートルで、ゴシック様式の外観を持ちながら、内部は木とガラスを用いた斬新なデザインでカセドラルさながらの巨大な空間が作りあげられていた(写真1と2)。ゴシックのアーチは淡い色の塗装が施された木製の桁で造られ、スカイライトから差し込む陽の光を反射して、室内全体(教会の“nave”身廊)を広々とした明るい空間にしていた。それは重々しいゴシックの外観と好対照を成していたという⁶。長く大きな廊下に多くの展示物が並べられた様子は壮観そのものであった。相馬はここを2度訪れているが、最初の留学で目を悪くして学問を諦め農業を専攻すべくミシガン州ランシングの農学校に通ったことがあるので、農業にも関心が高かったのだろう。

園芸館

農業館の南東、美術館近くに位置する園芸館は、その明るく広々とした空間とさまざまな展示物によって万博で最も人気のある建物だった⁷（写真3）。全長116メートル、幅58メートル、高さ21メートルの鉄とガラスの壮大な建造物で、メインフロアには大温室が設置され、大理石の噴水が置かれていた。図版2に描かれている椰子の木のほとんどは、アメリカに初めて紹介されたもので、構内は巨大な熱帯植物園のようであった。1851年ロンドン、そして1853年のニューヨーク万国博覧会のクリスタル・パレスの系譜に連なるガラスの大温室である。建物の周りも美しく、花壇や庭がデザインされていた。敷地からはスクルキル川の雄大な姿が眺められ、両側には、川まで続くロマンチックな谷が通り、谷の北側には農業館、谷の南側には美術館が位置していた。谷には、幅18メートル、長さ152メートルの橋が設けられていた。



写真3 園芸館の外観。

(*Old Philadelphia in Early Photographs*
1839-1914より)



図版2 園芸館の内部。

まるで熱帯植物園のようである。(Scientific American,
1876より)

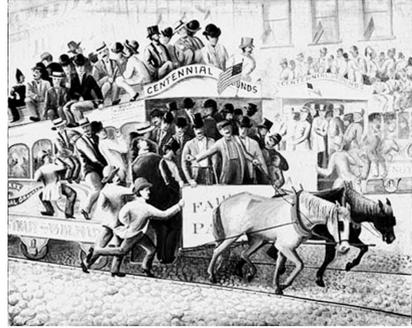
当時、「園芸」が horticulture の訳語として定着しておらず⁸、相馬より数週間遅れて万博を訪れた菊池武夫（中央大学創設者の一人）の日記では、「植木堂」という言葉が用いられている⁹。「植木」という言葉で、園芸館の全容を代表させるには無理があると思われるが、菊池は「最美クシキ建屋ニテ」、東西南北世界の異なる気温、湿度の気候帯から集められた草木が植えられ、あるいは鉢植えて展示されているとその印象を日記に綴っている（菊池の日記7月24日）。ここで菊池は面白い手動式の自動楽器を見たと書いている。1876年の万博には、目新しい発明品が多数展示され、のちに自動ピアノとして製品化される自動楽器が複数出品されたので、その一つを見たのだろう。園芸館の外を歩くと、色とりどりの花々が咲き乱れ、スクルキル川を眼下に眺める景色は見飽きないと感想も述べている。相馬も園芸館でこのような体験をして、外の庭園と景色も楽しんだのではないだろうか。

モノレール

万博の目新しい発明品のもう一つは、農業館と園芸館の間にある谷間にかけられた初期のモノレールである。当時の資料では、“elevated railway”（高架鉄道）という言葉が使われている。リロイ・ストーン式モノレールと呼ばれるこの乗物は、元北軍将軍リロイ・ストーンが考案した車体が一本のレールにまたがる方式の跨座式モノレールである。蒸気エンジンで動くその姿を捉えた写真（ステレオビュー）が現存している（写真4）。このモノレールはフィラデルフィア万博のために造られたもので、農業館へのアクセスを容易にする目的と、これからの都市に必要な最新の公共交通機関をデモンストレーションする目的があった¹⁰。瀟洒な内装の車両が、農業館と園芸館の間を往復していた。相馬日記には触れられていないが、菊池の日記にはこれに乗車したことが記されている。「爰（農業館）ヨリ



写真4 万博会場内の移動に考案された史上初のリロイ・ストーン式モノレール。農業館と園芸館を結ぶ170ヤード（155メートル）を走行した。（ステレオビュー）



図版3 市内と万博会場を結んだ100周年記念ストリートカー。二頭の馬が車を引いている。（フィレデルフィア歴史博物館のサイトより）

掛ケタ鉄道ハ、深キ谷間ヲ打渡シ」、谷間には木々が茂り、清流の音が聞こえる谷を、会場の人々の様子を下に眺めながら2、3分進み、レストラン前で下車して「植木堂」に入ったとある（7月24日付日記）。

これはアメリカ（恐らく世界でも）始めて乗客を乗せて運行したモノレールといわれるが、その後リロイ式モノレールが都市で採用されることはなく、万博会場内でもただ新規な乗物としてみられただけで、あまり注目を集めなかったようだ¹¹。しかしながら、高架鉄道（elevated railway）は都市の交通混雑に対処する安価な高速輸送手段として注目され、すでにニューヨークでは高架鉄道が造られており、相馬も見ているはずだ。相馬は農業館を2回も訪れているので、3セントを払って万博のモノレールに乗った可能性はある。

フィラデルフィアに到着した日に、ストリートカーでアメリカ人の知人に会ったと書いているが、このストリートカーの方は、線路を走る車両を馬が引っ張る乗物で1856年からすでに登場している¹²（図版3）。会期中1千万人もの万博来場者を会場まで運ぶうえで、蒸気列車とともにストリートカーも大活躍をしたが、万博終了後まもなくして電動式列車に取って代わられたというので、相馬はまさにそのような新旧交代、急速な技術革新をフィラデルフィアとニューヨークで体験したのだろう。

美術館

万博を恒久的に記念する為にペンシルヴァニア州とフィラデルフィア市が巨額の資金を投じて建造されたのがボザール様式の記念堂、これが美術館として使われた。みかげ石、ガラス、鉄を用いた耐火構造の建物は、見晴らしのよい高台に壮麗な姿で立っていた。

この美術館に足繁く通ったのは、後の東洋美術史家、このときはまだ大学院生だったアーネスト・フェノロサであった。フェノロサは秋に万博見学に訪れ（9月27日～10月5日）、日記を残している¹³。フェノロサの日記は相馬とは対照的に入場料からソーダ水の料金、ランチの内容までコメントとともに細かく記録されている。フェノロサは1週間で万博会場を精力的にまわり、美術館では作品について詳細に記録した。アメリカ絵画ではトマス・ヒルの《ヨセミテ溪谷》が素晴らしいとコメントし¹⁴、同じく風景画家のトマス・コールの名もあがっている。相馬は3日の万博見学で美術館を2回も訪れているので、アメリカの風景画を見ているだろう。トマス・コールはハドソン・リヴァー派と呼ばれる風景画家たちの集団の中心人物でハドソン川周辺の自然を描いた。ヒルも西部の荒々しい雄大な自然を描いたハドソン・リヴァー派の画家である。菊池武夫も記念堂を訪れたおり（7月22日）、驚くほど多くの展示作品のなかから、ベニスの湊や



図版4 フィラデルフィア万博に展示されたヒルの《ヨセミテ渓谷》。油彩。
182.88×224.15cm。オークランド美術館所蔵。

モンブランの山の絵とともに「カリフォルニヤノ秋ノ山」を特記している。これもトマス・ヒルの絵ではないかと思われる。ヒルの《ヨセミテ渓谷》を指しているのか定かではないが、《ヨセミテ渓谷》は横224cm、縦183cmと大型の絵なので、ヒルの描く雄大なカリフォルニアの山々に気づいたはずだ（図版4）。アメリカの荒々しい風景は明治初期日本人留学生にもアピールしたことが分かったが、相馬がどう感じたのか万博の記録からはうかがえない。実はアメリカの風景に強い関心をいただいていたのではないかと思われる事実が日記から見つかった。これについては、次節で述べる。

フェノロサは相馬より3歳若く、菊池よりも1歳年長で、3人とも多感な20代であったが、万博に対する感じ方が異なり興味深い。例えば、菊池は機械館（日記では「器械館」と表記）において建国100年のアメリカの技術力に圧倒され、細々した細工物を展示した日本の「細工手際ニ赤面ス」（7月28日）と述べているのに対し、フェノロサは巨大な機械館とコーリスの蒸気機関の展示に圧倒されても、菊池が赤面した日本の「精緻な細工」を「日本の展示は驚異の宝庫だ」と褒め讃えているからだ¹⁵。相馬は日記に意見を残していないので、推測する以外ないが、日本人であるならばや

はり菊池のように感じたのではないだろうか。

ピクチャレスク・アメリカ

科研報告書の《史料紹介》で指摘したが¹⁶、相馬はアメリカで *Picturesque America* という豪華本を手に入れている可能性がある。10月2日付けの日記に、20ドルという大金を払い知り合いの夫人から“American Picturesque”を譲ってもらう約束をしたと書かれており、どうもこれは *Picturesque America* ではないかと思われる。詩人でジャーナリストのウィリアム・カレン・ブライアントが編者となりアメリカのピクチャレスクな風景を集めて説明を加えたもので、1872年と74年にニューヨークで定期購読用に出版された。定期購読完了時に2冊の本に装丁され、厚い2巻本となっている。美しい挿絵が人々を魅了し、観光や自然保護に大きな影響を与えた本である。また、国を二分した南北戦争後の再建期において、国民にア

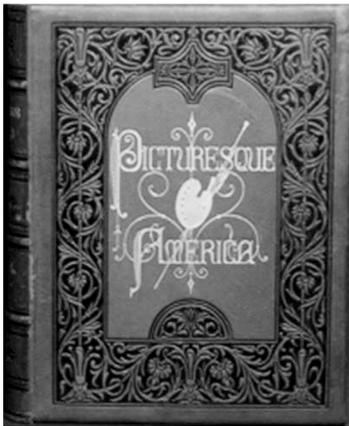


写真5 『ピクチャレスク・アメリカ』
の表紙。



図版5 『ピクチャレスク・アメリカ』の
「ウェスト・ポイントとハイランド」の風景。
(ニューヨーク公共図書館のサイトより)

アメリカの類稀な自然美を再認識させ、国家への愛着と自信を回復させ、ひとつの国家への再建に心理的な拠り所を与えるような役割を担った本でもある。日本のナショナリズムと結びついた志賀重昂の『日本風景論』が世に出るのはこれより18年後の明治27年であることを考えると¹⁷、相馬が明治初期の留学時代にアメリカ風景論の本にこれほど心引かれた事実に興味は尽きない。相馬がアメリカから持ち帰った多くの書籍は、関東大震災の火災で焼失したために、現物を見て確かめることはできないが、アメリカの風景画を研究してきた筆者には、相馬とピクチャレスクの関わりは興味深い発見であった。

アイスクリーム

フィラデルフィア滞在中に相馬は当時としては目新しいものを食していた。万博見学中の5日と6日にフィラデルフィアでアイスクリームを買いに出かけているのだ。アイスクリーム自体は、モノレールほどの目新しさはないものの、冷蔵技術の進歩で徐々に大衆に普及し始めた頃である。相馬が食したアイスクリームの何が新しいのか。日記には次の様に書かれている。“After the tea we went to take ice cream and eat and drink at home, ...” ここで気になる言葉は、“take”と“drink”だ。また、いずれの場合も夜間に購入していることが引っかかった。アイスクリームの場合には“take”ではなく“eat”であろうし、“drink”がなぜついているのか。“take”は薬などに使う。「持ち帰る」の意味も考えられなくもないが、その翌日に友人と店で食したときにも“take”が使われている。

アイスクリームの歴史を調べてみると、万博の2年前に、フィラデルフィアでアイスクリーム・ソーダが考案されていることが分かった。もともと医学的な効用が期待されたミネラル水の販売として始まったソーダ水に、通常のクリームの代わりに偶然アイスクリームを加えて販売したとこ

る飛ぶように売れ、たちまちのうちに広まったという。相馬はそのアイスクリーム・ソーダを購入したに違いない。

このアイスクリーム・ソーダであるが、当時ソーダ水（ミネラル水）はお酒のような人工的に調整された飲み物、つまり薬のようなものという認識があり、実際ドラッグ・ストアのソーダ・ファウンテンで売られていた。多くの若者がアイスクリーム・ソーダを好んで飲むことを世間は嫌い、酒と同様日曜日の飲用を禁ずる州や地域もでてきた。そのような宗教的背景がソーダ抜きの日曜のためのアイスクリーム、ice cream Sunday、を誕生させ、現代のアイスクリーム・サンディ（ice cream sundae）の起源となったという興味深い逸話もある¹⁸。

それはさておき、相馬はなぜ“eat”ではなく“take”を使ったのか。なぜ、夜間に買いにいったのか。日記をよく注意して読んでみると、一日目は、同伴してきた井伊少年の具合が悪く、その日は外出しなかったという文章の後に、前述の文章が続いている。調子の悪い井伊といっしょにアイスクリーム・ソーダを買いに行ったが、そこで飲用せずに持ち帰って宿舎で食した。翌日は、午後津田純一（イエール大学留学中）と行動をともし、夕方アイスクリームを“take”しに行ったと書いている。このときは2ドル払って椅子を確保しているので、持ち帰らずその場で食したのだろう。これから想像されることは、やはりソーダは、薬やお酒のように扱われ、積極的に子供たちに与えるものではなく、夕方酒場などで酒や健康飲料を飲む（“take”）ように、また健康の優れない少年に元気をつけるような感覚でアイスクリーム・ソーダを“take”したのではないだろうか¹⁹。

巨大なソーダ・ファウンテン

ソーダ水は初期においてはソーダ・ファウンテンと呼ばれる凝った装飾の装置をもちいて販売されていた。1910年にもなると、10万台のソーダ・



写真6 フィラデルフィア万博に展示された巨大なタフツ・ソーダ・ファウンテン（ステレオビュー）

ファウンテンが世に現れ一大市場となっていた²⁰。ソーダ水にアイスクリームを加えてアイスクリーム・ソーダを販売する販売員は、白いジャケット（ドラッグストアの名残り）と笑顔がトレードマークとなり、装置のハンドルを引くという意味の“jerk”（ソーダ・ファウンテンでアイスクリーム・ソーダをつくること、つくる人）と呼ばれるようになった。“Soda jerking”の高いスキルをもつようになると、スクープしたアイスクリームを空中に投げて、ミキシング容器で受けるといったパフォーマンスも披露された。こうしてソーダ水はついにはアップルパイと並ぶアメリカのアイコンとなった。

フェノロサは、万博会場でソーダ水を飲んだことを日記に記録しているが、万博には2社の巨大なソーダ・ファウンテンが展示されていた。写真6はその一つ、タフツ社のソーダ・ファウンテンである。2社は5万ドルという大金を払い万博会場でアイスクリーム・ソーダの独占販売権を手に入れている²¹。まるで厳かな「祭壇」のようなこの巨大なファウンテンは

タフツ社の3階立て建物の中に収められ、多くの人々が訪れ、これから起こるブームの先駆けとなった。

フィラデルフィアとソーダ水の歴史

相馬がアイスクリーム・ソーダを食したのも、万博会場に巨大なソーダ・ファウンテンが展示されたのも、フィラデルフィアがソーダ水の歴史と深く関わっていた土地柄から説明がつく。フランス人移民のイライアス・デュランドは、薬とともに発泡ソーダ水を販売したら儲かるのでは考え、1825年、最初の「近代的」ドラッグ・ストアをフィラデルフィアにオープンした。このときは大袈裟な機器は置かれてなかったが、すぐに地元科学者や医者や文人たちが集まる社交場となった。

1830年代後半には同じくフランス人移民ユージーン・ルーセルが瓶詰めのソーダ水に異なるフレーバーをつけることを思い立った。最初のフレーバーはレモンであったが、これがソーダ水の歴史の新たな幕開けとなった。こうしてソーダ・ファウンテンにはシロップのポンプが加えられるようになる。そして、最後の画期的な出来事、ソーダ水とアイスクリームとの合体が、1874年10月フィラデルフィアのフランクリン・インスティテュート50周年記念の会場で偶然起こった。会場でシロップ、クリーム、ソーダ水を販売していたロバート・グリーンがクリームを切らし、近所からバニラアイスクリームを買ってきて、溶かして使おうと考えた。待ちきれない人々のために、冷たいままのアイスクリームをソーダ水に入れて販売したところ、それが人気となり、会期の終盤には一日400ドルの収益を得るまでになったという。彼は数日してそれを商売に転じた。こうして新たなビジネスが誕生し、ソーダ・ファウンテンとアイスクリーム・パーラーが一体化することになった。このアイスクリーム・ソーダ誕生の2年後に万博が開かれたわけで、相馬たちがこの地でアイスクリーム・ソーダを食したのも、

会場に巨大なソーダ・ファウンテンが展示されていたのも、このような歴史的文脈の中で起こったことだった。

万博の目玉は機械館に代表されるような製造業の圧倒的な技術力であったことは間違いないが、ほとんど意味のない、ただ人を圧倒させるために造られた巨大なソーダ・ファウンテンも人気を博していたことはこれからの社会を予見させるものだ。あと半世紀もすれば、アメリカのアイコンともなるこのソーダ水こそが大衆消費時代の主役となり、消費を促す「広告」が大きな役割を担うようになるからだ。実際、万博はその後広く普及する炭酸飲料の実験場といってもよく、チャールズ・E・ハイアーは、紅茶用に乾燥した根、樹皮、ハーブ等の袋入り粉末を売って大成功を収め、それがソーダ水と合体してハイアー・ルートビアとして商品化されルートビアの元祖となった。それに続いて、ジンジャー・エールや黒いソーダ水のドクター・ペッパーなど考案され現在も愛飲されているが、もともとはいずれも薬剤師によって調合された健康飲料であった。このようなソフト（アルコールを含まない）ドリンクは、1906年の「純正食品法」(Pure Food and Drug Act) が制定されるまでは、薬品のように健康と治療効果が訴求されていた²²。相馬の日記の「アイスクリーム」についての記載から、現代では忘れられたソーダ水とアイスクリーム・ソーダの初期歴史を覗き見ることができ、万博がいかにもそのような歴史に関わっていたか理解できるのである。

アメリカの大統領選

1876年はまた4年に一度の大統領選の年でもあった。この選挙は、南北戦争後2期務めたユリシーズ・グラント大統領に続く大統領を決するもので、史上もっとも大きな議論を呼んだ選挙の一つであり、南部から連邦軍を引き上げさせ南北戦争後の再建時代に実質的なピリオドを打つことに

なった選挙であった。民主党の候補者がニューヨーク州知事サミュエル・J・ティルデンであったため、ニューヨークでは特に加熱した選挙戦が展開され、相馬も10月26日夕方に、民主党のたいまつを行進を見に行っている。ユニオン・スクエアには演説用の大きなステージが造られ、ティルデン候補も居合わせていた。ステージの前では花火があげられ大勢の人が集まっていたと書かれている。帰宅したのは真夜中の12時であった。

大統領選について触れているのは、その他2回で、ひとつは8月12日シャロン・スプリングス（ニューヨークの州都オルバニーから西に50kの村）に行つて村を見物しているときに下院議員ウッド氏の大統領選挙についての演説を聞いたと記している。よいスピーチだったと書いている。夜中の12時までシャロン・スプリングスに滞在し、午前1時に帰宅している。もうひとつは、大統領選挙が行われた11月の第2火曜日7日の日記で、相馬も選挙が気になったとみえ「夜10時過ぎに新聞を買いに出かけたが、選挙の結果はまだ分からなかった。（ニューヨーク）市では、民主党が大多数である」と書き残している。

選挙結果は混迷を極め、民主党のティルデンは、共和党の対立候補オハイオ州出身のラザフォード・ヘイズよりも一般投票では票を多く集めていたが、4州から複数の異なる選挙報告がなされ、次期大統領が決まるまで3ヶ月も要した。最終的には共和党のヘイズが大統領となった。このような経緯があるので、投票日の11月7日は、民主党支持が大多数を占めティルドンの当選に大きな期待をかけていたニューヨークではとりわけ市民たちが投票結果をいらだちながら見守っていただろう。その様子が相馬の簡潔な日記の記載からもうかがえる。

1876年の選挙は、ヘイズとティルデン間で行われた妥協により、ヘイズが大統領になる代わりに、南部からの連邦軍撤退などが受け入れられ、南部の共和党政権を崩し民主党が勢力を伸ばす契機となった。北部産業資本家層が、新しい敵（労働者、農民、中産階級）を抑えるために、黒人の権

利擁護を放棄し、南部支配層と手を結んだ結果であり²³、「新しい敵」が北東部の銀行に代表される産業資本家に「金本位制」から「金銀複本位制」への移行を要求する時代がすぐ後に続くのである。そのような時代の転換期の中に相馬は居合わせたことになる。

アメリカ留学の送金事情

相馬の日記から明治初期の留学生の送金事情を知ることができる。その手がかりとなるのは、日記中「gold」への言及であり、それは1876年に20件（12日分）ほどある。2月の言及は2日、3月が最も多く5日、5月が2日この後は9月の3日となっている。これをたどると、明治初期の留学生たちの送金事情が具体的に見えてくる。現地で受領した「金」ドルを、紙幣両替レートのない時期を見計らってドル紙幣に両替して、少しでも留学資金を増やそうと努力している姿である²⁴。当時の日本は新貨条例が制定され、金を正貨と定めてはいたが、一方で貿易用の銀貨を発行し、また政府紙幣や国立銀行券も流通しており、金銀貨と紙幣との交換は額面等価ではなく、日々変動していたことが知られている。この状況は実はアメリカも同様であり、「金」ドル、すなわちドル金貨とドル紙幣が額面等価ではなく、その交換比率も毎日変動するという状況であった。留学生たちは本国から送金された資金を有効活用するため、日々の金ドル＝ドル紙幣の交換比率に日々注意を払っていたのである。

まず、2月10日に日本からアメリカ「金」ドル\$912.26が送金された。日本円では950円に相当し、内訳は井伊500円、相馬350円、石黒100円であったと日記に記されている（1871年の新貨条例にて国内貨幣単位が「両」から「円」となった）。為替手形は、ブリティッシュ・ノースアメリカ銀行（カナダのブリティッシュ・コロンビアに設立された最も古い銀行で、ニューヨークとサンフランシスコに代理店をもっていた）で振出されたも

のである。二日後の12日には、ブリティッシュ・ノースアメリカ銀行に出向き、これを現金化した。また、その日には、「金」ドル900ドルを朝比奈名義でパーク銀行に預金したことも記録されている。

3月14日に、朝比奈が相馬の「金」ドルを紙幣に両替しようと思いがけなが、「金」ドルはまだ $14\frac{1}{4}$ （「金」100ドルに対して紙幣114.25ドル、すなわち額面の100ドルに加え $14\frac{1}{4}$ ドルの紙幣を受け取るレートの意）であったために、両替しなかったとある。その後18、22、25日とよいレートを求めるもののレートは上がらず、3月30日に、「金」ドル\$912を $13\frac{7}{8}$ で両替し、「紙」ドル\$1,037を得ている。5月8日には石黒の\$91.73を「金」ドルで受け取り、それを $12\frac{3}{8}$ で「紙」ドルに両替し\$102.98を得ている。

9月になると新たな送金があり、18日に「金」ドル\$1079.30を小切手で受け取っている。日本円では2月と同額の950円分であるが、9月には円／ドルの為替レートの関係で\$167.04多く受け取った。この小切手は29日に\$550を $10\frac{1}{8} = \$605.68$ で紙幣に換え、残りの\$529を「金」ドルのまま佐藤百太郎商会に預けた。紙幣に換えた\$605.68の内、相馬の口座に\$487.48、石黒の口座に\$125.80、井伊の口座に\$42.40と「金」ドル\$529とを入金したと記録されている。このように送金を「金」ドルと紙幣ドルに分けて保有した理由は、日常の支出が紙幣ドルで行われていたことに加え、「金」ドル／紙幣ドルの交換比率の好転に備えて一定の「金」ドル保有を残しておくという当時の留学生の知恵であったのだろう。

1876年のニューヨーク

相馬が滞在したニューヨークはどのような都市だったろうか。1870年代から80年にかけてニューヨークの人口は3割増え150万から190万人に膨れ上がり、すでに全米一の大都市として、ロンドン、パリに続く人口を抱えていた。

ボーディング・ハウス（下宿屋）も数知れず、ニューヨークは巨大なボーディング・ハウスそのものと言えるくらい、ニューヨークの特徴となっていた²⁵。相馬も含めた日本人留学生が寄宿していたのもそのようなボーディング・ハウスであった。大抵は女主人が経営し、富裕層が手放した家などを使い家具付き、あるいは家具無しの部屋を間借り人に提供していた。ボーディング・ハウスの生活は快適さからはほど遠く、家主とのトラブルが絶えず、借り主が満足することはほとんどなかったと当時のガイドブックには書かれている²⁶。相馬も一年間で3回引越をしており、2回目の宿舎は食事もまずく部屋が極めて寒いと文句を言っていた。マンハッタンは夏になると人口が極端に減少した²⁷。暑いマンハッタンを避けて島を抜け出す人々が多かったからである。ボーディング・ハウスも夏の間賃貸を中断することを容認していたという。相馬も3回目の引越は夏休みを挟んでおり、1年に3回も引越をしているのは、当時のニューヨークのそのような住宅事情が背景にあったからだろう。

自由の女神とブルックリン橋

ニューヨークを代表する建造物といえば、自由の女神像とブルックリン橋がまず思い浮かぶが、1876年のニューヨークでは両者ともまだ完成されていない。しかし、その一部はすでに姿を見せていた。自由の女神像は独立戦争とともに闘ったフランス国民からアメリカ独立100年を記念して贈呈されたものだが、台座建設費を分担したアメリカの資金集めが思うように進まず計画が大幅に遅れていた。それでも巨大な腕と松明がフィラデルファイの万博会場に展示され(写真6)、その後資金集めの一環としてニューヨークのマジソン・スクエアに1882年まで置かれた。誰でも50セント払うと松明のバルコニーまで登れた。

ブルックリン橋は、1869年に工事が始まり、7年後1876年には橋の塔の



写真6 1876年のフィラデルフィア万博で展示された自由の女神像の腕と松明。(ステレオビュー)



写真7 1876年のブルックリン橋 (J.H.Beal撮影によるパノラマ写真の一部。ニューヨーク市立博物館所蔵42.410.)

一つが完成しているのが分かる (写真7)。

セントラル・パーク

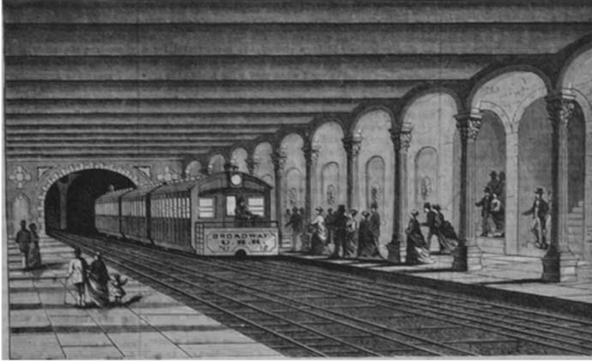
ニューヨークのもう一つの名所セントラル・パークは、マンハッタンのはほぼ中央、南は59丁目、北は110丁目、東は5番街、西は8番街に囲まれた843エーカー (3.41km²) の公園で、1850年代から工事が始まり、ようやく1870年代に最終的な工事が終了したところだった。科研報告書の《史料紹介》の「歩く」で述べたように相馬は好んでセントラル・パークまで散歩している。あらゆる階層のニューヨーカーに人気の公園で、1870年に342万人もの人々が訪れているが²⁸、相馬もそのような大勢の利用者の一人だった。

高架鉄道と地下鉄

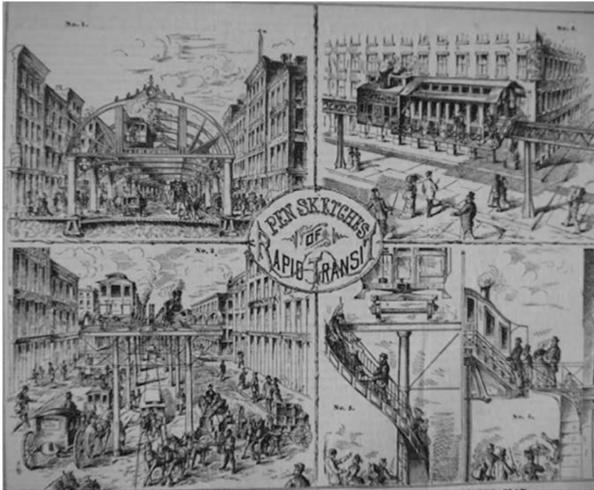
南北に細長いマンハッタン島では、南端の商業地域の発展は島を北上する形で進行しそれにつれて住宅地はさらに北に後退していった。ニューヨーク市の人口が50万を超える1850年頃には、南端のバッテリーから4マイル北上した42丁目まで開発が進み、都市の過密化が問題となって通勤時間を短縮するための高速輸送の必要性が高まった。人口が80万を超える1860年になると、市街鉄道やオムニバスの利用者が年間3,600万人以上に達し、6年後にはそれが倍増したという²⁹。当時市内には主に南北を結ぶ22の路線が存在し、大量の利用者をさばっていたが、様々な問題が報告されている。車両不足で乗客の半分以上は立ち通しで、車内は不潔で車掌は横暴、喧嘩が絶えず、スリも横行していた³⁰。ニューヨークの膨大な交通量に対応するための新たな高速交通システムが急務であることは明らかだった。

相馬が滞在していた1876年の *Scientific American* 誌は、そのようなニューヨークの高速輸送計画を取り上げている。第一面に地下鉄と高架鉄道の図版が掲載され、ニューヨークは混雑する道路の解決策として地下鉄をとるべきか、高架鉄道をとるべきか、高速輸送の現状と可能性について報じている³¹（図版6と7）。不景気時にはコストが安く建設期間も短い高架鉄道建設が支持されたが、好景気になると、スピードも速く、建設上自由のきく地下鉄に目が向けられた。しかし、1873年の経済恐慌を経て、再び安価な公共交通建設が求められ、高架鉄道案が再浮上したというわけだ。高架鉄道の案の中には、フィラデルフィアで菊池が乗車したりロイ・ストーン式のモノレールもあり、実現はしなかったものの、大都市の交通問題を解決する一つの方法として真剣に考えられていたことが分かる（図版7の右上と下のプラン）。

高架鉄道の方は、南端のバッテリーからハドソン川沿いを走るグリニッ



図版6 ブロードウェイ地下鉄の計画図 (*Scientific Americans* 1876より)



図版7 高架鉄道の様々な案。右上と下は、フィラデルフィア万博で披露されたロイ式モノレールを実際の都市に導入する案。(*Scientific American* 1876より)

ジ通りを12丁目まで、そこから9番街に入りセントラル・パーク北端近くの61丁目までの5マイル(約8キロ)がすでに運行されていたので相馬も見ているだろう。運行時間は34分であった³²。

地下鉄は許可申請中であり、繁華街のブロードウェイの地下に計画されていた（図版6）。

相馬はニューヨークから他の地域に行く時に“train”を利用したことは書いているが、マンハッタン市街での乗物についての記述はない。しかし、日記の最後の金銭出納簿には、セントラル・パークに歩いて行った日に“car”代5セントが計上されているので、このような交通機関を利用していたことは間違いない。地下鉄建設を進めるべきか、高架鉄道をさらに建設するか、相馬が居合わせたニューヨークは、これから世界のメトロポリスに大変貌をとげようとするまさにそのような時だったのである。

コロンビア大学キャンパスの北上

マンハッタンの繁栄とともに北上したのは商業施設だけではない。相馬の通ったコロンビア大学は、1754年に設立されたアメリカで5番目に古い大学であるが、設立当初は、マンハッタンの南端、ウォールストリート近くにあった（図版8）。19世紀半ばに、現在ロックフェラーセンターがあるミッドタウンの49丁目に移動し、19世紀末にはさらに移動し、現在のアップパー・ウェストのモーニングサイドに移転した。マンハッタン北上に伴い、大学の名称も、アメリカ独立後にキングス・カレッジからコロンビア・カレッジと変更されたものが、さらに「カレッジ」から総合大学「ユニバーシティ」となった。その数年前にはコロブスのアメリカ「発見」400周年がアメリカで盛大に祝われ、またニューヨークが文字通り Empire City、メトロポリスとなりつつあるような時代だった。大学も近代的なインスティテュートとしてさらにパワーアップをはかろうと、女子教育のバーナード大学も設立され、それも取り込み、新たな urban academic village の創造を目指したのだった³³。コロンビア大学メインキャンパスの北上はまさに大学の野心を反映した軌跡であり、相馬の留学は、その北上のちょ

コロンビア大学
キャンパスの北上



★ 1897年
モーニングサイド・ハイツ

★ 1857年
マジソン通り49丁目
(相馬留学当時のメインキャンパス)

■ 1876年留学当時のロースクールの住所
8 Great Jones Street

★ 1760年Park Place
(現在NY市庁舎のある場所)

★ 1754年トリニティー教会内

図版8 コロンビア大学キャンパスの移動。南端から、セントラル・パークの北西の現在のキャンパスまで大学の発展とともに移動。(筆者作成)

うど中間（マジソン通り49丁目）に位置する時代だった。

おわりに

相馬永胤が体験したアメリカは、これまで見てきたようにさまざまな意味で時代の節目であった。建国100年を迎えたアメリカ、それを記念した万国博覧会、南北戦争後の再建期を終わらせた歴史に残るスキャンダラスな大統領選挙、新たな交通システムが必要となるほどの発展を遂げていたニューヨークなど、相馬の日記を窓としてみると、その変化がとてつもなくエキサイティングなものとして見えてくる。とくに、万国博覧会は、フェノロサにまるで「お伽噺のように」「世界を1週間で見た」と言わし

めるほどの興奮を起こさせるものだった。もはや地球は無限に広がる平坦な大地ではなく、自分の手中にすっぽり収まった球体となって、火星の千年万博までもう一步だと、フェノロサは宇宙にまで延びる眼差しさえ手に入れているほどだ³⁴。言葉少ない相馬であるが、彼もまた留学によってそのような時代のアメリカに身を置いた。万博が世界の大きいなる実験場であったように、ニューヨークもまた生きた万博世界であり、アメリカすら大きいなる実験場であったろう。コロンビア大学がマンハッタン北上のちょうど中間に位置していたように、相馬もまさにそのような位置にいた³⁵。ただし、その後の歴史によって、それが中間であることが判明するわけで、渦中であればそれには気づかない。自由の女神の体の一部、ブルックリン橋の塔など夢の断片があちこちに落ちてはいるものの、それから歳月が流れてようやくそれがいかに重要なものとなるか理解できるのである。われわれはそのような有利な地点から相馬のみたアメリカ、ニューヨークをわくわくしながら散策できるのである。

注

- 1 Columbia Law School. 1858年にコロンビア大学に設立された。当時は2年間で終了し学士の資格が与えられた。現在の専門大学院ロースクールとは異なるためこれまでの慣習に従い「法律学校」とした。
- 2 黒沢真里子「《史料紹介》相馬永胤日記—1876年（明治9）1月1日から1877年（明治10）12月31日—」, 研究代表者 大谷正「相馬永胤家文書の基礎的研究—私立学校創立者の多面的分析のためのアプローチ—」平成25年度～平成27年度 科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書, 2016年3月, 専修大学リポジトリ公開 [http://id.nii.ac.jp/1015/00010354/].
- 3 *Scientific American*, May 20 (1876), p. 319.
- 4 *Ibid.*, p. 327.
- 5 *Magee's Illustrated Guide of Philadelphia and the Centennial Exhibition: A Guide and Description to All places of Interest in Or about Philadelphia, to the Centennial Grounds and Buildings, and Fairmount Park* (Philadelphia: Richard Magee & Son, 1876), p. 132.
- 6 Robert F. Looney, *Old Philadelphia in Early Photographs 1839-1914* (N.Y.: Dover

- Publications, 1976), p. 216.
- 7 *Scientific American*, May 20 (1876), p. 404.
- 8 世界大百科事典第2版の解説によると、「園芸」は horticulture の訳語として1873年出版された英和辞書で始めて用いられたとある。日本大百科全書（ニッポニカ）の解説によれば、『英華辞典』（1866）が最初と思われるとある。[<https://kotobank.jp/word/園芸-38077>] (2016. 8. 27)
- 9 「フィラデルフィア万国博覧会見学日記（明治9年7月～8月），中央大学百年史編集委員会専門委員会編『中央大学史料集 第6集（菊池武井関係資料2）』，中央大学出版部，1990.
- 10 H. E. Cox, "The Philadelphia Monorail," *The Journal of Transport History* 5.1 (May 1, 1961), p. 9.
- 11 *Ibid.*, p. 10.
- 12 フィラデルフィア歴史博物館のサイト参照。“Streetcar to the Centennial, 1876”の絵の説明文。
[<http://www.philadelphiahistory.org/node/56>] (2016. 3. 6)
- 13 村形明子「フェノロサの見た建国百周年記念フィラデルフィア万国博覧会」、『人文』第XXXII集，1986，京都大学教養学部，p. 78.
- 14 *Ibid.*, p. 117.
- 15 *Ibid.*, pp. 80-81.
- 16 《史料紹介》p. 66の文章をここにほぼそのままの形で引用する。
- 17 志賀重昂は相馬より13歳若い。相馬のコロンビア法律学校の学友で専修大学の母体「日本法律会社」の設立にも関わった江本高遠に学んだ時期があるので，ナショナルリズム（国民意識の高まり）と結びついたアメリカの風景について知る機会があったかもしれない。
- 18 “Origin of the Ice Cream Sundae,” Evanston Public Library のウェブサイト
[https://www.epl.org/index.php?option=com_content&view=article&id=218&Itemid=331] (2016. 3. 6) その他にもアイスクリーム・サンディには様々な起源が存在する。
- 19 アイスクリーム・ソーダが「罪深い楽しみ」と考えられていたことについて，以下の記事で説明されている。“Daily TWiP - National Ice Cream Soda Day,” *The Telegraph*, June 30, 2010.
[<http://www.nashuatelegraph.com/news/782745-196/daily-twip--national-ice-cream-soda.html>] (2016. 3. 6)
- 20 David M. Schwartz, “Life Was Sweeter, and More Innocent, in Our Soda Days,” *Smithsonian Magazine*, July (1986), p. 115.
- 21 *Ibid.*, p. 120.
- 22 *Ibid.*, p. 122.
- 23 竹中興慈「ヘイズーティルデン妥協」の項目参考。『ニッポニカ』[<https://kotobank>.

- jp/word/ヘイズ-テイルデン妥協-1589643] (2016. 3. 8)
- 24 本節では、当時の為替事情を知るために、高橋秀悦「幕末・明治初期のアメリカ留学の経済学—『海舟日記』にみる『忘れられた元日銀総裁』富田鐵之助（2）—」『東北学院大学経済学論集』第183号、2014年12月号を参考にした。本学経済学部の永江雅和教授（相馬永胤科研グループのメンバー）からは多大なるご助言をいただいた。
- 25 James D. McCabe, *Lights and shadows of New York life; or, The sights and sensations of the great city. A work descriptive of the city of New York in all its various phases* (Philadelphia: National Publishing Company, 1872), p. 502.
- 26 *Ibid.*, p. 503.
- 27 *Ibid.*, p. 506.
- 28 McCabe, *op. cit.*, p. 350.
- 29 William D. Middleton, *Metropolitan Railways: Rapid Transit in America* (Bloomington: Indiana University Press, 2003), pp. 2-3.
- 30 McCabe, *op. cit.* 交通機関に関しては、pp. 211-216と pp. 221-224を参照。公共交通の劣悪な状況に関しては同ガイドブックと、*Metropolitan Railways* にニューヨーク・ヘラルド紙の記事が引用されている。
- 31 *Scientific American*, April 1 (1876), p. 207, pp. 214-215.
- 32 *Ibid.*, p. 214.
- 33 この節は、拙文「マンハッタン滞在記—震災直後の渡米は驚きの連続でした—」『専修大学教員組合新聞』2012. 7. 22, p. 10より引用した。
- 34 村形明子翻刻, p. 132.
- 35 「中間」というのはメインキャンパスのことで、相馬の留学当時法律学校はメインキャンパスをさらに南下した場所にあった。地図を参照。